
這いつくばって

へうげもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

這いつくばって

【Nコード】

N5999Z

【作者名】

へうげもの

【あらすじ】

女性にしか扱えないIS インフィニット・ストラトス の操縦者を育成するためのIS学園。もし其処に普通の男性が2人目のIS操縦者になれば。。。これは、本当に普通の人間がIS操縦者になればこうなんじゃないかと独断と偏見に拠って書いた物なので、主人公は決して最強になりません。

プロローグ

朝、6時の練習場に一人の人間の足音が今日も音を立てる。
まだ、皆が寝ている時間に誰とも逢わない為に人類2人目の男での
IS搭乗者は人目を避けて努力を重ねる。

「・・・」

ただ、ただ無言で走る。口から漏れ出る音は空気を吐き出す音のみ。
彼は世の男性から期待されていた。自分の父親や親戚の大人達、ク
ラスメイトや学校の男性教師達、果てはIS学園に行く前には政治
家達にまで激励されていた。

それほどまでに世の男性達は世界に二人しかいない男性搭乗者達に
期待した。だがそのうちの一人。織斑一夏

彼に期待する人はいても声高々に期待を掛ける事は国としては無理
だった。なぜなら、彼には力では人類最強の守護者。織斑千冬
政治では人類最高の天災。篠ノ之束。国は織斑一夏に干渉しこの
2人がもし敵になりまた白騎士事件みたいな事を起こされる事を恐
れ彼には過度の接触をやめる事にし、何の後ろ盾も無いもう一人の
方に期待を掛ける事にした。

そして彼自身もその期待に答え様と頑張った。織斑一夏が動かせた
IS

その後に行われた全人類での男性によるIS適正試験、其処で唯一
の成功例が彼だった。だが、彼は適正がD、乗れてもそれを自由に
動かすこともましてや戦うことなど出来ない。

だけど、彼は頑張った。それは彼自身も自分を英雄と勘違いもした
だろう。だけどそれもまた無理も無いことだ。

考えてみても欲しい。15歳の人間がたった二人の男性IS搭乗者

になつて期待されれば潰れない為にも自分が英雄と思つて自己陶醉
しないとそのプレッシャーに潰れてしまう。そしてその期待に答え
るために頑張つた彼は・・・

壊れた。

これは、たった一人で世界の男性の為に頑張ろうとした一人の男の
底辺でもがくお話

1 適正D

とある研究所

キーボードを叩く音と研究者達の声が錯乱する場所。

その原因の人間である一人の少年はそれを聞きながら自分の人生が変わった事を確認していた。

「桐生君、何か変わったたり変な所、痛いところはない？」

少年に確認する研究者達、彼等は世界に2人しかいないIS搭乗者を研究する為に集められた研究者達、桐生浩太 彼が乗れる理由の一つを知る為に彼の解剖以外は全て試そうとしていた。血液の研究

DNA情報 骨格 細胞 その全てに異常は無かった、正確にはISが乗れる理由が解らず研究者達は彼にあらゆる事を試して反応が出ることを祈るが

「はい。大丈夫です 何も変わりはありません」

反応があるはずもなく研究者達は報告書を作成し、国は彼にISでの戦闘技術を求め 研究者達には彼のDNA情報から再生医療用の医療を求める方向で進む事になっていった。

「ふう」

膝に手を置き呼吸を整える。

少しは覚悟していたことであつた。世界で2人目の男性IS搭乗者。世の男性の憧れ、女尊男卑への切り札。僕はそんな事を皆から聞かされた。

だから僕はその為に今も朝から基礎体力トレーニング、昼は勉強、夜は戦闘技術や戦闘機シミュレーション。基礎体力は基本。勉強はISの事を知らないといけなくて、戦闘技術やシミュレーションは行き成りISに乗っても空に浮けないらしい、感覚が解らないのでISに近いもので訓練するみたい、

僕は基礎体力以外がIS学園入学者の中で最下位だつた

「格好悪いな・・・」

口から自然と弱音が出る

「休憩はもう良いかい？」

「はい、次は何をすれば？」

「今日は、後5km走れば、後は筋力トレーニングだね。」

「わかりました」

（頑張らないと。男だつて負けないんだ。）

適正がDしか無い僕は人の何倍も努力して少しでも入学前に追い付こうとこのトレーニングを繰り返して頑張つて追い付かないと。多分、もう一人の男の子も努力しているだろうし。

（首相官邸）

「これが、彼の報告書かい？」

一人の男が報告書を持ってきた男に視線を報告書に向けたまま問い掛ける

「はい」

「動かせることは出来るけど戦えば負けると？」

「はい。動かすことも適正はDなので、自分の思うようには動かせないかと」

「なるほど、構わない、今のままでいい、再生医療の方は進めて今のままでいい。」

（彼には悪いが私の為にいや男性の為に頑張って貰おう。）

「やはり、適正Bの織斑一夏の方がいいのでは？」

「駄目だ！ 彼に手を出せば白騎士、そして天災がまた何かをしてくる。忘れたのか？あの忌々しい事件を・・・
自分の研究の為にミサイル基地のコンピューターを一斉にハッキングし

2341発以上のミサイルを発射するという最大の暴挙をしたんだぞ！！」

（私は許さない・・・自分の為にあんな暴挙を・・・）

「今度は何をされるか、それに彼の報告書を見たが彼はこちらから

接触しなくてもいい。勝手にこの女尊男卑の世界を壊してくれるだろつ。

何せ、報告書を見る限り【守る】ということに執着しているんだ。姉を守る、友達を守る。さらに適正Dの彼よりも才能がある。

いい旗頭になるさ。」

（すまないね。桐生君、世間では君が期待されているが織斑君の為に壁になり男性の為に壁になってくれたまえ・・・その代わりに私はあの天災を捕まえ、世界を元に戻す。その為に君の人生を）

そんな事を考えているとは思わず、僕は入学までずっと訓練と勉強で入学まで過ごしていた。

2 入学式

（ I S 学園 ）

春に相応しく暖かな風に揺られ入学を迎える

「ふう〜。やっと終わった」

入学式の間ずっともう一人の男の子と一緒に視線を感じ落ち着かない時間を過ごすのは精神的にきつかった。もう一人の男の子も同じだったと思う。

感じる視線が友好、興味、敵意、同情等必ずしも良いものじゃ無かった。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRを始めますよー」

考えに集中していたらそんな声が聞こえて顔を上げるとにっこりと笑顔で微笑み黒板の前で挨拶していたのは僕の担任の先生になった山田麻耶先生、身長は低く顔は童顔で僕達に混じっても違和感が無く可愛い感じの先生。

服装もそれに合わせているのか可愛い感じの服装をしている。

「それではみなさん、一年間よろしく願いますね」

「……………」

（挨拶ぐらいしたほうが・・・）

女性陣は挨拶よりもたった二人の男性、男子、織斑一夏、桐生浩太の2人に釘付けになっていた。

「……織斑くん。織斑一夏くんっ！」

山田先生に目の前で大声で呼びかけられたのがもう一人の男の子織斑一夏君。

「は、はい!？」

考え事していたのが声が裏返っていたので周りからクスクスと笑い声が聞こえている。織斑君って結構面白い人なのかな。後で話しかけてみようと思っていると

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

と山田先生が涙目になりながら織斑君に頼んでいるけど山田先生先生なんだからそんな低姿勢じゃなく普通に頼んでも大丈夫なんじゃないか、や無いかと、

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ? 絶対です

よ!？」

涙目のまま山田先生は織斑君の手を取り詰め寄っているけど山田先生。これ自己紹介ですよ。まるで織斑君がイジメているみたいですよ。

「えっと、織斑一夏……です」

皆、織斑君に期待の眼差しを向けてますね、これは僕の時もこの眼差しを向けられるのでしょうか。織斑君の挨拶を参考にするためにも僕も集中して織斑君の自己紹介を聞いたところと思ってジッと集中している

「以上です!」

其処にお約束の用に織斑君の頭に黒い物が風を切る音と共に乾いた音が流れ織斑君は頭を抑えながら

「げえっ、関羽!？」

「誰が三国志の武将だ! !」

おお、織斑君。今度は先ほどとは違う重い音が織斑君の頭に綺麗に叩き込まれていた。織斑君体を張ったボケなのかな?

今の出席簿での叩き方も何か凄い速さで痛そうだったけど大丈夫かな

「織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてしまってますまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

山田先生。それは織斑君に無視されかけて涙目になっていた人の言う事じゃないかと

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

織斑先生　ここは今日から軍隊なのでしょうか？　でもISっていう兵器を教えるならこれぐらい当たり前なのかな？　確かに危険だし1年しか無いなら厳しくても当たり前前かなと納得していると

クラスの女子たちが途端に黄色い声を上げ色めき立つ

ISに乗れる女性なら誰もが憧れる女性織斑千冬先生

第一世代IS操縦者の元日本代表で公式戦無敗。しかも第一回ISの世界大会　モンド・グロツソの格闘部門及び総合優勝者
そんな事を考えていると頭に鈍い

「つつ」

頭に鈍い痛みと共に声が漏れて

「私の言う事は聞けと言ったはずだ。早く自己紹介をしろ」

どうやらいつのまにか僕の番なのに無視をしていたらしい

「桐生浩太と言います。趣味は読書と音楽です。よろしく願います」

そうして自己紹介を終わりHRも終わると僕は早速、織斑君の席に行って声をかけ仲良くなるうと行動を起こす前に一人の女の子に連れて行かれちゃった。仕方ないので少しでも授業についていくために入学前に貰った参考書をもういちど読んで時間をつぶすけどやらと視線と空気が重い。これはやっぱり男が少ないからなのかなでも仕方ないよね、少しでも男の強さを取り戻すためには我慢してついていかないと

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生、そしてノートに取っているのかノートに文字を書いているような音が複数聞こえる、もちろん僕も書いている。僕や織斑君はここに連れて来られたような物だろうけど女性にとってはここはエリートだろうしそれに相応しいようにみんな勉強家みたいだ。

ん 織斑君はなんでそんな泣きそうな顔でいるんだろう。

取りあえず僕は前を向いた方が安全なので前を指差すように合図を送るけど全く向かないね。織斑君、ここには山田先生以外もいるんだよ。

「そこ二人。何をしている」

(終わった・・・)

「お、織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか」

「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから（妙に先生嬉しそうですね・・・）」

山田先生もしかして頼られるのが嬉しいとかですか？

その証拠に胸を張りながらにこやかに織斑君に尋ねているけど

「ほとんど全部分かりません」

次の織斑君の答えで笑顔が物凄く困った顔に変わり周りの皆も少し戸惑いながら何故か僕のほうにも見ている人が何人か。僕は少しは理解していますよ。全部は無理ですが

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

誰も上げないというよりこちら辺は入学前に覚えているのが当たり前な空気に

「桐生君は大丈夫ですか？解りますか？」

「入学前の参考書を読んでいたので少し位なら大丈夫です」

織斑君そんな絶望したみたいに顔を下に向けて手を握り締めないで下さい。皆さんも何で空気読んでないみたいな顔を。読んでくるのが当たり前じゃ無いんですか・・・

「織斑。入学前に渡されたISの参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

その言葉と同時に今日三度目の出席簿アタックが轟音と共に織斑君の頭へ直撃していた。織斑先生、手加減という言葉知っていますか？今の音は普通の人なら出血してますよ。

「ツツツ」

織斑君は余りの痛さに声に鳴らない声が漏れていますね。周りは大爆笑ですが、何で大爆笑何でしょうか？逆に読まない方が可笑的いでしょ

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

そういった後、織斑先生は此方を向き全員を見渡しながら

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚えろ」

（織斑先生良い事いうな〜）

「いいかISは兵器だ。兵器を半端な考えで使う事は許さん。全員完璧に理解して使え。無能な味方は敵より厄介だと覚えろ。」

「織斑は放課後、山田先生と補習しろ。理解するまで覚えろ。反論は許さん」

(怖いけど言ってることは正しいよね。ISは既存のどの兵器より優秀なんだからそれを使おうとすればちゃんと理解しないと)

織斑君絶望しないでちゃんと頑張ってるね、これは当たり前前の事なんだから逆にちゃんと覚える努力してなかったんだね・・

次の休み時間

やっと僕は織斑君に話しかけようと少し俯いている織斑君に声をかける

「織斑君、ちゃんと参考書読んでこないと駄目だよ」

少しへこんでいる織斑君を元気付けようとしたけど言うことは言わないとね

「ああ。今日から補習だから頑張るよ。」

「そう。僕は、桐生浩太って言うんだ。宜しく」

「織斑一夏だ。よろしく頼む。桐生」

うん。良かった。男子二人だし、仲良くしたいもんね。

「ちょっと、よろしくって?」

「「え?(は?)」」

いきなり知らない人に声を掛けられ振り返ると鮮やかな金髪に青色

の力チユーシヤを付け淡い青色の瞳でこちらを見つめる女の人、確か自己紹介の時にセシリア・オルコットさんと言った気がする人えくっとなんでそんな機嫌悪そうにこちらをみているのかな。

「織斑君、呼んでるよ」

「一夏でいいよ。桐生を呼んだんじゃないのか？」

「僕も浩太でいいよ。僕じゃないと思うよ。さっきの休み時間も誰かに呼ばれていたしこの人もそうなんじゃないかな？」

とぼくは一夏にこの女の人を任せて逃げよう

「わたくしに話しかけられることだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？全く挨拶すら返せないとははこれだから男は」

延々と続きそうだけどこの人は何がしたいのだろう。ISが女性しか使えないと世界の常識ができてから何故か女性の人々が急に偉そうになった。コンビニで買い物しようとして外を歩くだけで見ず知らずの女の人を買う物を頼まれることも偶にある。世の中の出世とかも女性が優遇されているらしい。その証拠に政治家も女性のほうが当選数が増えたらしい。僕は母さんも学校の先生も普通だったのであまりこういう偉そうな女の人に余り逢った事が無いので苦手なのでどうすればいいのかな

「悪いな。俺、君の事知らないし」

(知らないの??)

「僕は知ってるよ。セシリア・オルコットさんだよ。確か入学式

の時には挨拶してた入試主席の」

「私を知らないといいますの？ この、セシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、そちらの方が言った通りの入試主席のこの私を！？」

(凄い自尊心だねオルコットさん)

「うん。知らない」

「代表候補生って凄いねオルコットさん。」

「あのさ、代表候補生って何？」

(一夏。人が折角話を沈静化しようとしてるのに何で火に油を注ぐかな・代表候補生ぐらいそのまま解るだろう。)

「代表候補生とは国の代表を選ぶ為の候補生だよ。オリンピックのマラソンとかで出てくるとの意味は一緒だよ。ようするに国を代表するからエリートだね。」

「そう。そちらの方が言う様にエリートですわ。男でISを操縦できると聞いていましたけれど、期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

「まあでも、私は優秀ですから。貴方のような人間にも優しくして差し上げますわよ。解らない事がありましたら、泣いて頼まれれば教えて差し上げてても良くてよ？」

「何せ私、入試で教官を倒した唯一の一人ですから。そう、エリート中のエリートなのですわよ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

はい?? 一夏 教官倒したの？ 僕は何も出来ずにただ倒されただけなのに。

「一夏 それ本当？ 本当に教官倒したの？」

「倒したっていうか……、避けたら壁に突っ込んでいった。」倒したっていうか……、避けたら壁に突っ込んでいった。

(教官の人何をしているの。)

「わ、ワタクシだけと聞きましたが？」

「一夏のは倒したといわないし、オルコットさんだけが厳密に言えば倒したと言えるんじゃないかな？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「一夏!？」

(バカ。そんな事を言えば。というより一夏のは倒したとは言わないよ)

「あなた、あなたも教官を倒したって言うの!？」

顔を真っ赤にするオルコットさんが此方に詰め寄りながら言葉を掛ける。入学主席で唯一教官を倒したのが自分だけと思っている所へ大したことが無いと思っていた男が自分も倒したといい更には自分

の事など知らないと言われれば。うん 辛いね。一夏もクラスメイ
ト位知ってようよ。

チャイムの音で二人の会話も何とか終わり周りでは席に着きながら
も此方の会話を伺っている皆気になるのかな？ 男性IS搭乗者を。
僕も女性IS搭乗者が気になるけど皆がオルコットさんみたいな人
ばかりだと辛いね。心のどこかで男性を見下しているって事だし。
このIS学園にいる間に少しでも男の人もやれるって事をみせるん
だ。

「話の続きはまた後で、よろしいですわね」

（まだ話すことがあるんだね）

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明
する」

三時間目に教壇に立つのは織斑先生だった。クラスの皆もさつきよ
りも幾分姿勢を正して授業を聞く体勢になっている。流石織斑先生

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め
ないとな」

（代表者？）

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席・・・クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

はい?? 再来週?? まだ入学したばかりですよ?? ISまでもに乘れる人の方が少ないですよ?? 専用機持ち全クラスいるんですか??

まゝうちのクラスは代表候補生候補のオルコットさんでしょうね? 入学主席これ以上の人はいないでしょう

「はい、織斑君がいいと思います」

(何を言ってるんですか?)

「では候補は織斑一夏。他にはないか? 自薦他薦は問わないぞ」

(織斑先生 何を言ってるんですか?)

「つて、俺え!?!」

一夏もそりゃ焦りますよね。

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか? いなければ無投票当選だぞ」

(いやいや、それは駄目でしょ織斑先生。フザケすぎです)

「セシリア・オルコットさんを推薦します。」

そうセシリア・オルコットさんしか有り得ない。ISの強さはIS

稼働時間に比例すると言われている。なら代表候補生のオルコットさんならIS稼働時間はこのクラスの誰より多いはず、当然オルコットさんの戦闘を見るだけでも僕の訓練になる。僕と一夏はまだISの経験が圧倒的に足りないんだから見る事が出来るだけでも良い経験だ。

「桐生君を推薦します」

(何で僕までみんなふざけすぎだよ)

「織斑先生。誰が考えてもセシリア・オルコットさん以外有り得ないと思うんですが？ 僕も織斑君もIS稼働時間が1時間もありません。それに対してオルコットさんは代表候補生なので稼働時間がこのクラスよりも高いはず。さらには入試主席なのでオルコットさんの戦闘を見るだけでも勉強になります。逆に僕等の戦闘を見ても誰の勉強になるとも思いません。さらに生徒会への出席なども僕達はこのIS学園の勉強に付いていくだけで必死なのでクラス代表になる余裕が無いのでオルコットさんに頼みたいと思います。」

そう僕と一夏にはそんな余裕など無いはず。少しでも早く強くならないと。

「そうですね。そちらの方の言う様に男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

いやオルコットさん それは言い過ぎじゃないですか？

「大体、文化としても後進的な国に暮らさないといけない事自体、ワタクシにとっては堪え難い苦痛で」

オルコットさん、それは言い過ぎだよ。代表候補生なら発言に注意しないと一夏も睨まずに我慢してやり過ぎさないよ

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろう、世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏・・・ここで発言しても意味が無いんだよ。僕等が強くなつてISの優位性を無くして発言しないと変わらないんだよ

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのはそつちだろ！」

(ダメだ、完全に頭に血が上つてる 落ち着かせないと)

「一夏、落ち着きなよ。オルコットさんも落ち着こう。お互いの国を侮辱するのは良くないよ。クラス代表もオルコットさん「決闘ですわ!」に、何を言ってるの?」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい「バカ!!」浩太」

「一夏、僕の言う事を聞いてなかったの?代表はオルコットさん以外あり得ないし僕達じゃまだ勝てないんだよ。」

「そんなの解らないだろ。浩太はここまで言われて悔しくないのかよ。」

男だろ!？」

『桐生君ちよつと格好悪くない〜情け無いよね〜。』

「別に悔しく無いよ。勝てないのも事実だからね」

（そう、僕はISに乗る力があるISに乗れずに悔しくそれでも歯をくいしばってこの世界を変えようとした人達に比べれば僕は恵まれてるのにそれに比べれば何と言われようか）

「それに戦ってどうするの？僕達は専用機も無いしちゃんと乗る事も出来ない。乗るだけ無駄だよ、なら戦闘を見て勉強する方が無駄にならない僕達に無駄な時間は無いんだよ。」

「専用機なら織斑はある。それと桐生、私は自薦他薦は問わないと言った。覚悟を決めろ。」

（僕は専用機ない気がするんですが。ただ殴られて沈めと？）

「あら、貴方は専用機ありますのね、良かったですね。貴方も決闘ですわよ。私がその情け無さを鍛えて差上げますわ」

（大きなお世話だよ。僕の専用機が無いのはノーコメントなんだね）

「織斑先生。決闘は解りました。最後に質問です。専用機持ちは全クラスいるのでしょうか？」

「話はまとまったな。それでは、勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナにて行う。それと専用機持ちはこの1組に2人と4組に1人だ。」

「解りました。」

何で4組の人は1組じゃないんだろ。1人だけ他のクラスに送るよ

り1組に3人入る方が訓練もしやすく専用機持ちなんだから適正は高く稼働時間も長く4組で実力が浮くはず。クラス代表の為？
なら一夏かオルコットさんも別れるはずだね。何か一緒に出来ない理由が？ さっきの織斑先生も無理矢理戦わしたいみたいに感じたり何かあるのかな？ ISは兵器と言いなからちゃんと覚えてもない一夏や僕をオルコットさんと戦わす。勝てるわけも無いのに。まるで負けて欲しいみたいに。

負けて欲しい？ 負けて男はやっぱり弱いと確認？でも一夏は織斑先生の弟。弟を危険にさせるのかな？いや一夏は専用機があるんだっけ うゝん解らないな兵器といいながらちゃんと教えずに行き成り戦闘 いくら絶対防御があってもエネルギーが切れて落ちれば怪我はすると思うんだけど。 情報が少ないからもう少し情報を集めてから考えようかな。

今は一週間後の試合を考えよう。少しでも乗れるようにまずはラフアール・リヴァイヴの使用申請を出しとくかな。一夏はどうするか。一夏は何のためにISを乗るんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5999z/>

這いつくばって

2011年12月19日23時47分発行